

「自閉症スペクトラムとその周辺障害」

京都市児童福祉センター 門 眞一郎先生

なぜ、自閉症ではなく、自閉症スペクトラムなのか

最初にテーマ、タイトルとして自閉症スペクトラムという言葉を使いましたが、スペクトラムという言葉は、最近かなりよく使われるようになりました。欧米ではもう、自閉症スペクトラム、自閉症スペクトラム障害と言うのが当たり前になっていますけど、従来の自閉症とどう違うのか、**連続体だ**、という考え方を込めたんですね。

重度から軽度へと繋がっている、それがスペクトラムという言葉が使われる理由です。

スペクトラムとは連続体のこと



<カナー・タイプ>

対人的孤立・人に無関心
言葉を話さない
常同運動、反復的な物の扱い

<アスペルガー・タイプ>

人に関心はあるがか関わりが一方的
会話が困難、字義通りの解釈
特定の興味に没頭

<健常>

自閉症スペクトラムとは？

自閉症スペクトラムというのは、生まれつき脳の働き具合が偏って発達している、そういう発達障害の人たちです。で、大事なのは発達の遅れではなくて、偏りです。たぶん、養護学校に来ている子どもで自閉症と診断がついている子どもは、10中8、9、あるいは10人が10人とも知的障害を同時に持っている。ですから、発達の遅れもあるし、偏りもある。そういう二重の発達障害を持っているのですが、知的障害だけの子どもと同じ学校で生活しなくちゃいけない、同じクラスで同じ活動をしたりしますよね。共通項は遅れのところですから、つい遅れのところで理解してしまいがちなのですが、そうすると、偏りのところで十分な配慮がいかなくて、パニックを起こされたり、いろんな、いわゆる問題行動とかが出てきやすくなる。だから自閉症スペクトラムというのは、遅れではなくて偏りだということは、しっかり押さえておく必要がある。脳の情報処理の仕方が一般の人とは違うわけです。遅れているとか、レベルが低いとか、幼稚であるとか、そういうこ

とではないのです。また、物事の感じ方とか、理解の仕方が一般の人とは違う。だからどういうふうに違うのか、どういうふうに偏っているのか、そういう障害特性を理解して対応していく必要があるのです。

遅れと偏りについて

知的レベル

- n 知的発達レベルはさまざま
- n 知的発達に遅れあり (e.g. IQ/DQ 70-75以下) :
 - n 知的障害 (精神遅滞) を伴う自閉症スペクトラム
- n 知的発達に遅れなし (e.g. IQ/DQ 70-75以上) :
 - n 高機能自閉症スペクトラム
- n 高機能自閉症スペクトラム (知的障害がない) で、ことばの発達に大きな遅れがない :
 - n アスペルガー症候群

知的な発達レベルは様々です。

遅れと偏りを組み合わせると人間は4つのタイプに分けることができる。遅れも偏りも両方あれば、自閉症スペクトラム+知的障害だし、遅れはあるけれども偏りがなければ知的障害です。遅れは無いけれども偏りがある場合は、高機能自閉症スペクトラムですね。その中で、典型的な自閉症で高機能の場合は、高機能自閉症。それからアスペルガー症候群も高機能ですね。

遅れと偏りとの組合せ

	遅れ	ある	ない
かたより			
ある		自閉症スペクトラム +知的障害	高機能自閉症 スペクトラム (高機能自閉症/アスペルガー症候群など)
ない		知的障害	健常

ある子どもがあるところでLDと診断されて、別のところでは自閉症といわれるのですが、さらに別のところに行くとADHDといわれる。というようなことが現実にあります。それはなぜかという、どこに注目するかというのがそれぞれの診断名で違うからなのです。

診断の混乱～どこに注目するか～

自閉症スペクトラムというのは、対人関係と、コミュニケーションと、想像力+こだわり、この3つがあるかないかで診断します。ADHDというのは、注意欠陥多動性障害の略ですけど、それは注意と、多動性・衝動性というこの2つの行動特徴に注目して診断しているのです。学習障害、LDというのは語字とか書字とか計算とか推論する力の発達障害です。診ているところが全部違う。だからある子どもが全部持っているということもあり得ます。あるいは2つ、自閉症スペクトラムとADHD、あるいは3つ持っている場合もあって、別のところでは別のことを言われるということがあり得るわけです。だから子どもの全体像をちゃんと診ないで、ADHDにばかり興味がある医者のところに行くと診断が偏ってしまうということがある。ですから、そういう診断の偏りというのをできるだけ無くして、全体像をとらえるためにWHOは子どもや青年期の精神科の診断は多軸でやりなさいと言っているのです。それぞれの軸をちゃんと押さえて診断しなさいと。

多軸診断（WHO）から見た自閉症・学習障害（LD）の位置

通常診断	自閉症 (+精神遅滞)	高機能自閉症	アスペルガー 症候群	学習障害 (文部科学省)
多軸診断 1軸 精神医学症候群	自閉症 (広汎性 発達障害)	自閉症 (広汎性 発達障害)	アスペルガー 症候群 (広汎性 発達障害)	なし
2軸 特異的発達障害	混合性言語障害 (表出+受容)	混合性言語障害 (表出+受容)	受容性言語障害	言語/読字/書字/ 計算力障害
3軸 知能水準	精神遅滞	正常範囲知能	正常範囲知能	正常範囲知能
4軸 身体的病態	身体的病態 (+/-)	身体的病態 (+/-)	身体的病態 (+/-)	身体的病態 (+/-)
5軸 心理社会的問題	環境要因 (+/-)	環境要因 (+/-)	環境要因 (+/-)	環境要因 (+/-)
6軸 全般的機能水準	0良好～8最重度 まで9段階	0良好～8最重度 まで9段階	0良好～8最重度 まで9段階	0良好～8最重度 まで9段階

・・・高機能というのは、知的障害がない、ということだと言いましたけれども、高機能といえども自閉症スペクトラムには変わりがないです。高機能であろうが、無かろうが、自閉症スペクトラムです。つまり、遅れがあるかないか、ということと、偏りがあるということは別の問題なので、その偏りはちゃんと押さえておかないいけない、ということなのです。養護学校であれば、知的障害のある自閉症スペクトラムの子どもがほとんどであると思うのですが、先生方が異動されて養護学校から通常学級に行ったときに、アスペルガー症候群という診断名がついている子どもがいたとしたら、その場合、高機能であっても自閉症スペクトラムである、という点をしっかり押さえておかないといけない。

AD/HD (DSM-IV) の合併 (WHO多軸診断の変法)

通常診断	自閉症 (+精神遅滞)	高機能自閉症 or AD/HD	アスペルガー症 候群 or AD/HD	学習障害 or AD/HD
多軸診断 1軸 精神医学症候群	自閉症(広汎性発 達障害) + AD/HD	自閉症(広汎性発 達障害) + AD/HD	アスペルガー症 候群(広汎性発達 障害) + AD/HD	多動性障害(ICD) or AD/HD(DSM-IV)
2軸 特異的発達障害	混合性言語障害 (表出+受容)	混合性言語障害 (表出+受容)	受容性言語障害	言語/読字/書字/ 計算力障害
3軸 知能水準	精神遅滞	正常範囲知能	正常範囲知能	正常範囲知能
4軸 身体的病態	身体的病態 (+/-)	身体的病態 (+/-)	身体的病態 (+/-)	身体的病態 (+/-)
5軸 心理社会的問題	環境要因 (+/-)	環境要因 (+/-)	環境要因 (+/-)	環境要因 (+/-)
6軸 全般的機能水準	0良好~8最重度 まで9段階	0良好~8最重度 まで9段階	0良好~8最重度 まで9段階	0良好~8最重度 まで9段階

自閉症スペクトラムの人の特性

自閉症スペクトラムの人の偏りとはどんなものか、特性がどのようなものか、ちょっと整理してみますと・・・

自閉症スペクトラムの人の特性

- n 目で見て理解することは得意
- n 具体的で明確なことの理解は良好
- n 経験したことを記憶することは得意
- n 論理や正確さにひかれる
- n 部分に注目することは得意
- n 興味あることには集中する
- n いったん習得したことは律儀に実行

- n 言葉を耳で聞いて理解することは苦手
- n 抽象的であいまいなことの理解は苦手
- n 経験していないことを想像するのは苦手
- n 字義通りに解釈する。柔軟性に欠ける。屁理屈をこねる。
- n 全体をまとめることは苦手
- n 興味の幅が狭い
- n 応用や手抜きは苦手

感覚刺激に対する感じ方が違う

「目で見えて理解することは得意。耳で聞いて理解することは苦手。」この偏りが一番大事。これが十分に押さえられていないと、不適切な対応をしてしまって、子どもが問題行動を出していくということになりがちです。高機能で、アスペルガー症候群のようによくしゃべる子どもでもです。というか、よくしゃべる子どもは特にこの問題が忘れられやすい。よくしゃべるので当然理解できるのだ、と思われがちです。でもやはりアスペルガー症候群といえども自閉症スペクトラムなので、目で見えて理解するのはいいが、耳で聞いて理解するのは苦手なんですね。

具体的で明確なことを理解するのはいいのだけでも、抽象的で曖昧なことは理解できない。抽象的で曖昧なことというのは、言葉と密接に組み合わさって日常生活なんかに出てきますので非常に理解しづらいです。逆に言うと、具体的で明確で、目に見えるようなことというのは非常に理解しやすい。「ちょっと待ってね」とか、「それはあとにしてね」というようなことは非常に抽象的で曖昧なことですから、受け取る人によってどう理解が大きくずれてしまう。

経験したことを記憶することは得意ですが、経験していないことを想像するのは苦手です。自閉症スペクトラムの診断で注目することとして、対人関係、コミュニケーション、想像力の3つの領域をいいましたが、想像力っていうのは、一つの大きな障害の領域なんです。はじめての出来事、はじめての行事とか、はじめての場所、そういうことを想像するのは苦手です。どちらかという、そういう場合に不安になったり、怖くなったり、という子が多いですね。まあ、一般の子どもだと必ずしもそうじゃない。経験していないはじめてのことだから期待するということもあると思います。でもそれが、自閉症スペクトラムの子どもにはなかなか難しく、特にはじめてのことに関して言葉で説明されるとよくわからず、言われれば言われるほど何がなんだかわからなくて不安になる。

論理や正確さに惹かれる。特にアスペルガー症候群や高機能自閉症の人たちですが、論理的なこととか、正確なことに惹かれます。逆に言葉を文字通り解釈したり、柔軟性に欠けたり、屁理屈をこねる、あげ足を取る、ということになってしまうことがあります。

部分に注目することは得意なのですが、全体をまとめる、全体を把握することは苦手です。特に部分的なことで視覚的に理解する、部分的で視覚的なことには惹かれやすい。往々にして、そういうことは今は関係ないこと、今は全体の意味はこういうことなのですよ、ということがなかなか理解してもらえない。そういう場合に言葉で説明するとますますわからなくなる。

興味があることには集中するのですが、その幅が狭い。

いったん修得したら律儀に実行するのですが、その修得したことを応用したり、あるいは一般化したりってことができないのです。

感覚刺激に対する感じ方が違う子どもが多い。聴覚刺激は多くの方が過敏だったり、あるいは逆に非常に鈍感だったりする。聴覚以外にも視覚とか、触覚とか、嗅覚とか味覚とか、そういったものに過敏な人が多い。

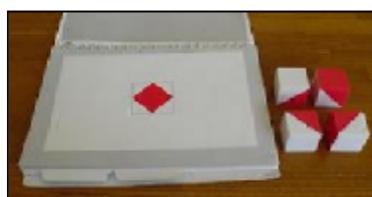
まあ、こういった特性が自閉症スペクトラムの人にはありますので、得意な方を上手く活かしてあげる、得意な方をしっかり伸ばしてやる、評価してやる、苦手な方を得意なことなどでなんとか補う、ということが大事です。苦手なことだけをがんがんとトレーニングしようとか、責め立ててもなかなか進歩しませんし、お互い、嫌な気分ですしね。

コミュニケーションには視覚的支援が必要

視覚的構造化、というのが自閉症スペクトラムの子どもにかかわる場合に、一番大事だと私は思っています。なぜ視覚的構造化が必要なのかは、ちゃんとした根拠があるのです。

[客観的な根拠]

まず、検査結果が視覚的な構造化の必要性を語っています。知能検査や発達検査の成績が非常にばらつくわけです。どんなことができてもどんなことができないのか、というのを見ると、ある程度共通します。一つは、言葉で答える必要のない課題というのは得意です。検査の場面というのは、検査する人と検査を受ける人とのコミュニケーションの場なのです。自閉症スペクトラムの子どもの診断基準の2つ目はコミュニケーションの障害です。コミュニケーションの障害というのは、自閉症スペクトラムの基本的な障害なのです。で、



課題-1

検査場面もコミュニケーションの場面ですから、そのコミュニケーションの障害が検査場面には当然出てくるわけです。視覚的な手がかりがある問題で、答えを言葉で答えなくていい、例えば色の着いた積み木を組み合わせる問題として提示された模様と同じものにするという問題（課題-1）。こうい

うのは、視覚的な手がかりがあつて、自閉症スペクトラムの子どもが非常に得意とする問題です。知的障害のある自閉症スペクトラムの子どもでも、この問題は平均以上の優秀な成績をおさめることが珍しくありません。視覚的な手がかりがあるんですね。それから答えは言葉で返す必要がない。手で答えればいい。目で見て理解し、手で答える。目と手を通したコミュニケーション場面というのは、得意なのです。しかもこの問題は、4つに分割して一つ一つがどういう並び方をしているのか、というのを考える・・・つまり、一つ一つの部分に分けて、早くその部分に注目しないといけない問題です。自閉症スペクトラムの人の特性の一つである、部分に注目することが求められる問題なのです。

同じ視覚的な問題でも、絵カードを時間の順番に並べ替えるという問題がありますが、これは、自閉症スペクトラムの人は苦手です。絵カードを例えば、3枚とか4枚とか見せられて、それを時間の順番に並び替えるというのは、ざっと見て全体の意味、ストーリーをつかまないといけない。部分部分にずっと注目してたらダメなんですね。だからこの積み木模様とは逆の考え方です。部分より早く全体を見る。だから苦手です。視覚的な問題だけど、成績が悪い。それから、視覚的な手がかりがない、口頭試問は苦手です。言葉で質問されて言葉で答えなきゃいけない、つまり、耳と口を通したコミュニケーションは苦手。しかし、目と手を通したコミュニケーションはできる。そういうギャップが大きいのです。そういう成績の特徴からすると、当然コミュニケーションをとるためには、視覚的な支援をしっかりとっていくということが大事だ、ということになるのです。

[主観的な根拠]

自閉症スペクトラムの経験者が言っています。知的にはレベルの高い、自閉症スペクトラムの人でも、こういうことを言うわけです。

テンプル・グランディンという人は、女性で、アメリカのコロラド州立大学で動物行動

学の助教授をしている人です。彼女は日本にも2回来て講演しています。一度聞いたことがあります。まあ、聞いている限りは、流暢に英語でしゃべっています。その人は、「私は、画像で考える。言葉は私にはまるで第2言語のようなもの。私は、話し言葉や書き言葉を音声付きのカラー映画に翻訳する。」と語っています。話しかけられたら、頭の中でビデオテープを再生するように、その言葉をいったん頭の中で画像変換して意味を理解する。具体的なものは、簡単に画像変換できるそうです。でも、抽象的な言葉は、なかなか、工夫が必要で、例えば、平和。すぐにパッと画像にはならないので、アメリカインディアンが友好のしるしにパイプを回しのみする場面（そういう習慣があるんですね）を頭の中で映像化して、理解するそうです。そういう面倒くさいことをして理解しているんですね。

それから、**グニラ・ガーランド**というスウェーデンの女性ですが、この人は「言葉で説明を聞いても頭の中で画像にならないければどこかに飛んでいってしまう。画像にならない言葉は無意味、理解できないままになってしまう」と語っています。みんながみんなそうしているわけではないみたいですが、頭の中で画像変換して言葉の意味を理解している人にとっては、言葉だけでコミュニケーションをとられるというのは一番しんどいやり方なんです。最初から画像も一緒に付けてくれば、頭の中で画像変換しなくても済むわけですから、早く理解できるはず。ですから、言葉で話しかける場合でも、できるだけ視覚的な手がかりを組み合わせるというのが自閉症スペクトラムの人に対して親切な、自閉症フレンドリーなやり方です。

それから、**ウェンディ・ローソン**という人は、オーストラリアの人ですが、「私にとって文字で書かれた言葉の方が口で話された言葉よりずっとわかりやすい」というふうに書いています。文字になっているものは、目から入ってきますので、話された言葉よりもわかりやすい。それと、もう一つは、消えて無くならない。話しかけられた言葉は次々に消えていく。文字になって見せられた言葉は、普通はすぐには消えていかない。

ケネス・ホールという人は、この本を書いたとき、十歳の男の子です、イギリスの。この子は「人が話しかけてくるとしゃべっている言葉が文章になって見える」と語っています。文字になって見える、画像ではなくて文字に変わる、というふうに書いています。

そういう体験談からも、また、検査結果からも、自閉症スペクトラムの人には、言葉だけ（耳からだけ）で情報を入れてコミュニケーションをとろうとすることは、一番難しい方法で、一番不親切な方法です。何とかして目から理解できるような、視覚的な手がかりを用意してあげることが親切だし、理解が早いということになります。つまり自閉症スペクトラムの人は、**百聞は一見に如かず**、ということが、切実なのです。

百聞は一見にしかず！

- 耳と口を通してのコミュニケーションよりも（あるいはその補強として）、目と手を通してのコミュニケーションの方が容易。
- とても、とても視覚優位！
- 徹底的に『百聞は一見にしかず！』

構造とは、場面の意味と見通しで、構造化とは、それを明確にすること

一つの場面の意味の受け取り方には可能性として幾つか考えられます。構造というのは必ずあります。どんな場面にも必ず意味と見通しがあるわけですから。ただ一つとは限らない。例えば、今、外から自閉症の人が入ってくるとします。パッとこの場面を見て、どういう場面か、と考えた場合に、我々が考えているのとは違う意味として受け取る可能性がある。・・・こういう風にみんな座っていると、今から劇があるのかなと思うかもしれない。部分に注目するのは得意ですから、入ったとたんこのマイクに注目するかもしれない。そして“あ、今からカラオケや”と受け取る子どももいるかもしれない。普通の人はその意味がよくわからなくても、あるいは間違っただけで受け取っていても、言葉で言って言葉で説明すれば間に合う。でも自閉症スペクトラムの子どもに対しては、それは難しいことなのです。特に言葉での構造化は。だから視覚的な構造化を推奨するわけです。その場面の意味と見通しを、見てわかるようにする、というのが視覚的な構造化です。

・・・世の中いろいろ見渡すと、一般の人にとっても視覚的な構造化がずいぶん役に立つということがわかります。この視覚的な構造化というのは、自閉症スペクトラムの人だけではなく、目が見える人、ほとんどの人にとっては、わかりやすいことなのです。

構造が明確化された環境は誰にとっても必要



(バス停写真)

まず、構造化は、意味と見通しだということを言いましたが、見通し、という点では・・・例えば、これは京都のバス停なんですけど、視覚的に見通しが立つようにしています。このバスの番号は系統番号。各系統毎に窓が3つあって、・・・これを見れば、バスがいつ来るのか、・・・次の自分の行動を決めるのに非常に重要な情報がわかる、見通しが立ちます。・・・逆に自閉症スペクトラムの子



(信号のランプ)

どもにとって、見通しの立たない状況、あるいは言葉でしかそれが伝えられていない状況だと、非常に不安になったり、イライラしたりすることが起こりやすいということなのです。一般の人にとっても、この(ランプの)消え具合を見て、まだ当分待たされるとわかれば、地下道を行こうとか、命がけで突っ切ろうとか、自分の次の行動を決めやすくなる。それから、砂時計も。ある時間、だいたい3分程度、一定の活動を続けて欲しいことを伝える場合、使えます。ある活動をするまで待つて欲しい、これだけの時間待つて欲しい、という場合でも使えます。

構造化いろいろ

これはうちの診察室ですけど、絨毯敷きで土間があって、段差が非常に低いので、はじめての子どもは必ず靴のまま上がっていくんです。私は、診察の時にちょっと使うんですが、あえて子どもをその場に入れて、絨毯に上がってから背後から言葉だけで指示します。“靴脱いでね”って。自



(「くつをぬぐ」構造化)

閉症の子どもは通じないですね。そういう言葉だけでは。視覚的にも他のことに惹かれて

いますので言葉が入らないです。そしたら今度は“靴脱いでね”と言ってここを指さします。するとそれでわかる子もいるし、それでもわからない子もいます。わからないとここまで連れてきてもう一度これを指さします。今まで一人だけ幼稚園の年長の子でしたが、ここまで連れてきてこれを見せてもダメだったんです。ところがその子はひらがなが読めると聞いていたので、これを読ませたらすぐに脱いでくれました。絵では通じないけど文字で通じたんですね。これはこの場面の「ここで靴を脱ぐ」という意味の構造を視覚的に伝えているわけです。

これはある養護学校の教室です。教室の中でやる活動によって机の位置を変えたりするとき、このように色分けし、生徒の名前が書いてあると、自分は椅子や机をどこに持っていったらよいのか、ということが分かり易いです。また、同じ教室の一角ですが、段ボールで仕切りをして、ここでは休憩しかしない

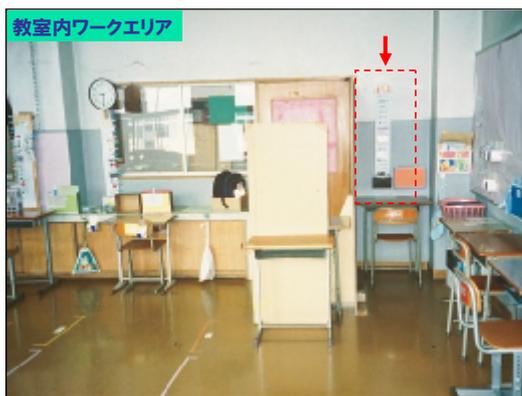


(位置がわかるように・・・)



(休憩するところ)

というふうに、場所と活動を一対一で対応させて分かり易くしています。また、子どもによって余計な刺激をどの程度遮断してあげる必要があるか、が違います。大抵の子どもは正面に壁があるだけでいいのですが、子どもによっては3方から必要な場合もある。音は少々入ってきてもいいですが、視覚に強いのが裏目に出ると余計なものにすぐに目が行ってしまいます。音は背後から聞こえていても、余計なものが目に入らないようにすれば集中できる子どもが多いです。それから、一人一人にスケジュールを用意する。スケジュールは、見通しという構造をはっきり伝えるものです。



(ある養護学校の教室)



(スケジュール)

スケジュールは、見通しを視覚的に伝えるために非常に重要なもの 子どもにあったスケジュール・・・

子どもによってどんなスケジュールにするのか、一人一人、その子にあったスケジュールにしないといけないですね。写真、文字、絵あるいは、具体的に活動に使う道具を使うか、それは子どもに応じて違います。それから見通しが立つためには最後はどうなるのか、最後はいつ来るのか、ということが非常に大事です。修学旅行に行くときに、下見の先生が写真を撮ってきて、リングで止めてめくる式のスケジュールを作りますね。自閉症や知的障害の子のために。行き先だけの写真、次はこれ、次はこれというふうに。順調にいったんですが、だんだん終わりが近づくにつれてイライラしだしたんです。終わりがなか

ったんですね。終わりがどうなるのかが全然わからなくて、すごく不安になったんです。次の年に同じようにスケジュールを作って、最後にお母さんの写真にしたらそれでOKでした。最後はやっぱり、家に帰れるのかどうかとわからないと。笑い話みたいですが、そういう見通しが立たないと、もう、とたんに混乱してしまうのが、自閉症ですね。

また、「今これ」というのがはっきりわかるようにするため、赤い枠で囲ったり、矢印を使ったり……。あるいは、カードを手渡すことでスケジュールを確認しに行く、手渡されたカードをここまで来て入れて次のスケジュールを確認する、というやり方のスケジュールもあります。



(子どもによって違うスケジュール)

私が担当している養護学校の中学1年生の子は、6年生までは地域の学校の障害児学級にいました。そこでも一応スケジュールは作ってもらっていましたが、なかなか軌道に乗っていませんでした。私が授業を見に行くとすごくいやがって、帰れ、帰れ、と帰れコールが始まるので、早々に退散していました。でも中学に入って初めて行ったときは、まったく言わなかった。どこが違うのか。小学校の方は、スケジュールに「私に来る」というのが入っていませんでした。いつもと違うことがあるのに、それがスケジュールに入っていなかったら、そのスケジュールは信用できない、スケジュールとして意味をなさないのです。スケジュール通りにやろうとしてるのだから、おまえがいたら困るというわけなんですね。スケジュールはあくまで、変更はあっても最終的にはこのスケジュール通りに一日が終わりました、というふうにならないと信用できないものです。

面白いことに、スケジュールを使い出した時に、割と早いうちに出てくることが多いのですが、いやなことは入れ替えるのです。あるいは外したり、やりたいのを入れたり。こういうスケジュールという視覚的な道具があるから自発的なコミュニケーションができるということなのです。無かったら、そんなこと伝えられない。こういうものがあるから、これをしたいとか、これはやりたくないとか、順番はこの方がいいとかいうことを伝えられるんですね。スケジュールを子どもがいじくるとするのは、問題行動ではなくてコミュニケーション行動としてちゃんと受け止めなくてははいけない。

これは、自閉症と軽度知的障害の小学2年生の子どもです。夏休みに1日預かる機会があったので、予定の変更をスケジュールで伝えたらどうなるか、ということを試させてもらったのです。自閉症の子どもは予定が変わるとパニックを起こすことがよくあります。だけど考えてみると、予定の変更というのは大抵言葉でしか言わない、伝えないですね。特に

予定

時刻	予定内容	変更内容
8:00	おはようございます	
8:15	朝の活動	
8:30	おはよう	突然予定変更!
10:30	おはよう	
11:00	おはよう	
11:30	おはよう	
12:00	おはよう	
12:30	おはよう	
13:00	おはよう	
13:30	おはよう	
14:00	おはよう	
14:30	おはよう	
15:00	おはよう	
15:30	おはよう	
16:00	おはよう	
16:30	おはよう	
17:00	おはよう	

パニック!

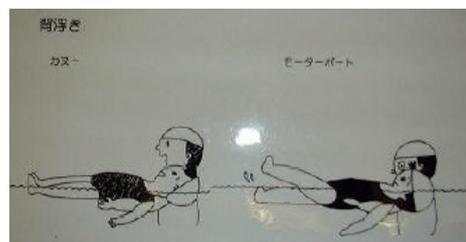
突然予定変更!

(予定の変更をスケジュールで伝える)

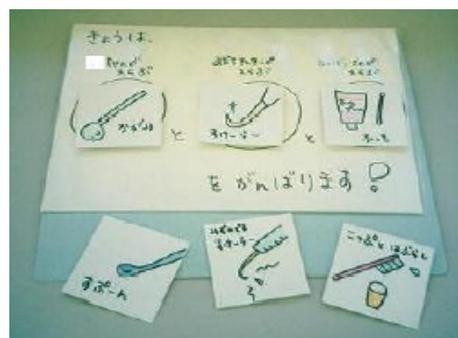
突然の、直前の変更は絶対に言葉でしか伝えない。たぶんそれが伝わらないからパニックを起こすのではないかと考えたんです。見てわかるように予定の変更を伝えたら、どうなのか。あらかじめ予定表を家でも見せてもらいました。そしてその子がやって来てから、夜の8時15分に花火というのを書き加えて、「予定変わります」と伝えたのです。これで大丈夫だったんですよ。でもその話をすると、じゃあその子は花火が好きだったからパニック起こさなかったんだ、というふうに言われるかもしれませんが、翌日こういうことがおきたんです。僕のところで、1時からビデオを見ました。家から持ってきた自分の好きなビデオなのですが、あるシーンだけ繰り返し繰り返し延々とやるので、覚えてしまいます。私の娘が歌うと別にどうってことないのですが、私が歌うとすごくいやがる。歌うと“やめろ”と言って突進してくるのです。で、私も退屈なものですから、また歌うと、また怒ってくる。ちょっとしつこく何回もやったら、彼は“帰る”と行って飛び出していきました。こんな時間に帰るといわれても困るので、どうしようかと思ったんですが、とにかく連れ戻して、この予定表が貼ってあるところにつれてきて、予定を見せながらこれから後の予定の説明していきました。8時にお母さんと家に帰ります。これ2回くらい言いました。それでおさまりました。その後も予定通りに全部こなしていきました。言葉で、特に叱ったり注意したりするとますますパニック状態になるんですが、予定の変更とかあるいはパニックを起こしているときでも、やはり目から情報を入れてあげて言葉は最小限にした方がいい結果が出ます。

これも見通しの問題ですが、障害者のスイミングサークルで、ある自閉症の子はどうしても仰向けに浮く、というのが出来ない、させようとしてもすぐに浮き上がってしまう。初めてのことというのはどうしてもわからないですね。沈められるんじゃないか、と怖くなったたりして。でもこの絵を見てこういうふうになるんだよ、と伝えるとすっとやれる。

これはアスペルガー症候群の小学生が使っていたものですが、今日やることを3つ、それぞれ子ども本人と歯科医と歯科衛生士が選ぶというシステム。どうしてもやらなきゃいけないものは歯科医と歯科衛生士が選んで、まあ、どうでもいいのから選んでもらう・・・ちょっと詐欺みたんなんですけども・・・。自分も対等に参加して、今日の予定を組んであげるといので非常にいい。



(仰向けに浮く・・・視覚支援)



(えらぶシステム)



(否定的な禁止)

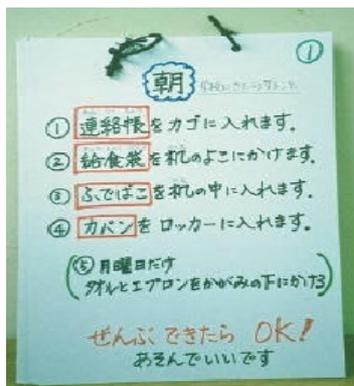


(肯定的な禁止)

これは、知的障害と自閉症の両方を持っている子供が1年生のときに家のお風呂でこういう行為に及んだので、親が作ってラミネートし、お風呂の中に貼っておいたカードです。これは否定的に禁止しています。で、もう一つは、これも同じ親が作ったのですが、肯定的な禁止というのか、出来るだけ否定文を使わない、肯定文で伝えられる

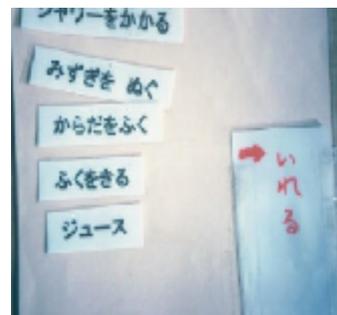
なら、肯定文にした方がいい。あるいは否定文で伝えるときでも対にして、ペアにして伝える方がいいですね。

これも障害者スポーツセンターのプールで、ある自閉症の子が一人で更衣できるよう、お母さんが指導していた人と一緒に考えたものです。4枚ぐらいのラミネートした台紙にマジック



(朝することの手順)

テープが貼ってあって、済んだら封筒の中に入れていく。全部済んだら外でジュースが飲める、というものです。



(一人で更衣できるように)

これはある障害児学級で使ったものです。先生が職員朝礼をやっている間に済ませておいて欲しいことを順番にしてあります。大事なことは赤で囲みわかり易く、全部出来たらおしまいということですね。この先生は他にも掃除の時の手順とか、給食当番のときの手順を同じ様に作っています。

これは、知的障害の人の授産施設です。この作業机で作業しているのは自閉症と知的障害を併せ持つ人です。この段ボールで仕切りがしてあって、よけいな視覚的な刺激が入ってこないようにしてある。この人は、乗り物がすごく好きなので、作業工程は双六式

になっていまして、10個ずつ出来るとこの絵を向こうに貼っていくのです。この時間は一応30がノルマでゴールになり、終わります。終わったら休憩。こうなると彼は自主的に作業を30やって、休憩にはいる。休憩時間は何をするか、ということもあらかじめ朝来たときに写真で選んでおきます。この日はJRの時刻表を眺めるというのを選んでいきますね。この時刻表は実はこの作業機のすぐ下に置いてあって見えるのですが、休憩時間までは手を出しません。いつ見ていいかということちゃんとわかっているのです。いつ見せてもらえるかわからないと、来たとたん自分で見てしまうのですが、こうしてあれば、そういうことにならない。それから、困ったときは手を挙げる。これを使うまでは、彼は材料が足らなくなったりしたときに、いきなりパニックになっていました。でもこれが視覚的に示してであると手を挙げて職員を呼ぶようになりました。



(作業机)

この日はJRの時刻表を眺めるというのを選んでいきますね。この時刻表は実はこの作業機のすぐ下に置いてあって見えるのですが、休憩時間までは手を出しません。いつ見ていいかということちゃんとわかっているのです。いつ見せてもらえるかわからないと、来たとたん自分で見てしまうのですが、こうしてあれば、そういうことにならない。それから、困ったときは手を挙げる。これを使うまでは、彼は材料が足らなくなったりしたときに、いきなりパニックになっていました。でもこれが視覚的に示してであると手を挙げて職員を呼ぶようになりました。



(休憩時間用)

自閉症スペクトラムの人とのコミュニケーション

自閉症スペクトラムの人にとって、機能障害の一つであるコミュニケーション。我々と自閉症スペクトラムの人とのコミュニケーションをどのように取るのかは、非常に重要な問題です。障害特性に応じた工夫をしないとイケない。コミュニケーションというのはメッセージのやり取りですが、一方的なものではなく、両方からのやり取りなのです。

我々→子ども

- こちらが表現する
- 子どもが理解する
- 分かりやすい内容
 - 具体的に
 - 肯定的に
 - 整理して
- 使いやすい手段
 - 視覚的構造（明確）化

子ども→我々

- 子どもが表現する
- こちらが理解する
- 分かりやすい内容
 - 手段に左右される
- 使いやすい手段
 - 視覚聴覚的道具
 - 視覚的道具

コミュニケーション手段の工夫

- 自閉症の人にどう伝えるか：
視覚的・具体的・肯定的に
- 自閉症の人からどう伝えてもらうか：
視覚的な道具で
 - 例：物、絵、写真、文字によるコミュニケーション・ブックやコミュニケーション・ボード
 - 特に自発的なコミュニケーションのためには PECS

コミュニケーション支援の道具

視覚と聴覚を使った手段としては、**VOCA**という音声出力型コミュニケーション支援機器があります。視覚的な手段としては、**絵とか写真とか**を使って自分の要求をしたり、・・・欲しいものの写真を手渡すことで、伝える等がある。これをもっと徹底的にやる方法に **The Picture Exchange Communication System (PECS)** というのがあります。**PECS**では、コミュニケーションの機能を要求とコメントという2つにまとめてしまうのです。

例えば「これが何か言ってごらん」といったときに、正しく答えられたら褒められたり、頭をなぜられたり、歌を歌ってもらえたり・・・といったように、コメントに対して返ってくる結果というのはソーシャルな結果ですよね。自閉症スペクトラムの子どもというのは、そういうソーシャルな結果というのはあまり意欲を高めてくれない。理解するのが難しい。要求というのは、要求したらその要求したものが返ってくる、そういうコミュニケーションです。要求したものが手に入るというのは非常に分かり易い。ですから、要求から教えていくということをPECSではやります。今までのいろんなコミュニケーショントレーニングというのはコメントから入るのが多かった。例えば“これは何ですか？言ってごらん”“良くできましたね”そういうコメントとソーシャルな結果というトレーニングが多かったのですが、自閉症の子どもには効果が上がらないんですね。だから要求に基づくトレーニングが必要になる。自分の欲しい絵カードを相手に渡して欲しいものをもらう、



(PECSコミュニケーション・ブック1)



(PECSコミュニケーション・ブック2)

そういうことから始めるトレーニングなんです。

今までの例えば絵カードを使ってコミュニケーションを教えるというのと違うのは、相手に手渡すことを最初から徹底的に練習するのです。必ず相手に手渡す。欠点といえば、渡す人と手伝う人が二人いるということです。二人いないとできない。二人いれば手伝って相手に手渡すことを毎回させることが出来るわけです。相手に必ず手渡せるので必ず要求したことが返ってくる。最初は全部手伝ってもらうが、手伝ってもらうことはだんだん控えていって、最後は自分で手渡していけるようにするというふうに、二人がかりでしていく。毎回失敗が無い、しかも要求から入るので成功しやすい。それから、必ず相手に手渡すということを最初から教えていくので、人がいなくても探して手渡すようになります。それもだんだんと受け取る人が距離をあけていって・・・隣の部屋に行ったり、学校なら職員室に行って手渡してもらって、そういうことが出来るようになるわけです。それから、もし、誰もいないところでカードを持っていたり、あるいは、絵カードを指さしていても、それは単なる独り言にしかすぎないわけですが、このPECSのやり方は、独り言を教えない。最初から必ずコミュニケーションを教えるのです。

PECS (ペクス) とは？

- The Picture Exchange Communication Systemの頭文字
 - 絵カード交換式コミュニケーション・システム
- 開発者は？
 - Andrew S. Bondy, Ph.D.
 - Lori A. Frost, M.S., CCC/SLP

〈門先生のホームページ中「絵によるコミュニケーション」参考〉

<http://web.kyoto-net.or.jp/org/atoz3/kado/index.htm>

PECSでは何を教えるのか

- PECSは、コミュニケーション障害の人に機能的なコミュニケーション・スキルを教える。
- PECSは、最初から自発的コミュニケーションを目指す。
- コミュニケーション・トレーニングは、プラスの結果をもたらす機能的な行為から始める。

・・・・・・これも偶然なんですけども、何年か前に迷子の小学生に遭遇したことがあります。小学校の3、4年生くらいの男の子でしたが、「お母さんいないの？」と話しかけたら、返ってきた答えが「バイク右折禁止ってどういう意味」だったんです。これでもう、自閉症だと診断してしまいました。1秒以内、最短記録です。で、まず「名前は？」「どこから来たの？」と聞いていくのですが、だめなんですね。交通関係の質問が逆に返ってくる。「タンクローリーは

何を積んでるの？」とか。それで、紙とボールペンを用意して、紙に「名前は？」と書いてボールペンと一緒に渡したんです。そしたら名前を書いてくれました。で、「どこから来たの？」というのも書いてみましたが、これは続きませんでした。とにかく交番に連れて行って、相手をしました。名前はわかったので次は住所を知りたかった。それまでかなりの時間やり取りがあって、言葉の端々に時々「かめおか」という地名が出てきました。ひょっとしたら亀岡市から来ているかもしれないというので、亀岡市と四角い枠を書いて、「亀岡市→はい、次なんでしょう？」と書いて鉛筆を渡したら、「〇〇1丁目」と書いたんです。「じゃもう一つ」「亀岡市〇〇1丁目、その次なんでしょう？」と聞いたら、4桁の数字を書きました。で、交番のお巡りさんから〇〇1丁目の管轄の交番に電話してもらいました。そしたら、そんな番地はない、と。で、結論を言うと、それは番地ではなくてお

母さんの車の番号でした。でもなんか数字だというのは、伝わっているんですね。お母さんに聞くと、同じ亀岡市内から引っ越してまだ1ヶ月もたっていなかったそうです。番地まではまだ正確に覚えてないけど、何となく意味が伝わるんですね、これで。ちなみに、お母さんが1時間後に来たんですけど、「お宅のお子さん自閉症ですね」と言ったら、違う、と言って「LDです」と言いました。絶対、自閉症です。

分かりやすい表現・・・

参考：藤沢晃治「分かりやすい表現」の技術

－ 意図を正しく伝えるための16のルール－（講談社ブルーバックス，1999）

相手の立場に立つ、障害特性を知る、視覚的見通しを与える、構造明確化・・・視覚特性重視性。自閉症スペクトラムの人には、その障害特性からいって視覚的に構造を明確にするのが一番の近道です。

構造が視覚的に明確にされていない環境、つまりコミュニケーションが成立しない、あるいは成立しにくい環境に自閉症スペクトラムの子どもを置くということは、これはもう心理的な虐待に等しいというくらいの認識をぜひ持っていただきたい、ということで終わりにしたいと思います。

